

動乱の世と三種の神器

南朝の最高指導者、北畠親房は名著「神皇正統記」で、後醍醐天皇崩御直前の吉野について、こう思いめぐらしている。「ところで今は正統の天子なき旧都京都では、戊寅の年(建武5年=1338)改元して暦応の年号を使用。吉野ではもとより旧来の年号延元を用いたから、以後、日本各地で思い思いにこの二つの年号が用いられることとなる。中国ではこのような例も多いが、わが日本の国にはそのような例は聞いたことがない。しかし正統の天子後醍醐天皇のいますことすでに四年になんなんとするとするこの地吉野のある大和国はその昔の皇都にゆかりの地でもある。いま天皇とともに神鏡・神璽の敵に存在するこの吉野こそ、唯一の皇都でなくてなんだろうか」(中公バックス日本の名著9 慈円・北畠親房、笠松宏至訳)。ここには、三種の神器とともにある天皇こそ正統の天子であり、その居所こそが皇都であるという親房の南朝正統論が明確に示されている。しかし、吉野に至るまでの後醍醐と神器の結び付きは、破綻の連続であった。



元弘元年(1331)、笠置の落城で南山城をさ迷っていた後醍醐は、捕えられて宇治に連行された。そこで幕府側が真っ先に要求したのが三種の神器の引き渡しである。後醍醐は答えた。「鏡は笠置の本堂に捨て置いたので、灰燼にまみれているだろう。神璽は山中の木の枝にかけたまままだ。宝剣は武士に玉体を汚されぬよういまも身に帯びている」。この強い言葉において鎌倉から派遣された討幕軍の指揮官も、その場での追及をあきらめたと、太平記は語る。後醍醐が実際に持ち出せたのは神璽と宝剣で、女官の日記に「内侍所(神鏡)はおはします」とあり、鏡の方は宮中にとどまっていた。天皇は、剣璽(宝剣と神璽)の引き渡しを京都に帰ってからも渋っていたが、数日後には返還に応じた。引き取りに向いた公卿らの確認作業によると、神璽の筥の緒が切れているほかには破損はなかったという(後醍醐の先代花園天皇の日記)。それでも、戦場から帰還した神器なので触穢の恐れがあるとして、しばらくは天皇から離れた場所で保管された。



隠岐配流、夜陰脱出、船上山合戦と、過酷な局面を踏み越えて取り戻した皇位だったが、建武政権の崩壊

で、後醍醐は延元元年(1336)十一月、事実上、足利尊氏に膝を屈した。尊氏が擁立した持明院統光厳上皇の弟、光明天皇に三種の神器を渡し、自らは退位するのである。しかし、翌十二月、幽閉されていた花山院を抜け出し、吉野で皇位の回復を宣言した。太平記は、光明に渡した神器は「かねてより御用意ありける似せ物」だったとし、花山院脱出に当たっては、本物の神器を女官に持たせ、自らも女装して築地の崩れから忍び出たと描いている。以後、南朝は一貫して北朝の神器を「偽器」「虚器」と呼び、自らの所持する神器こそ皇位の正統性を証明する本物だと主張し続ける。



北朝第3代の崇高天皇が光明の後を継いだ貞和4年(1348)、三種の神器のひとつ宝剣をめぐって、不思議な事件が出現した。安徳天皇とともに壇ノ浦に沈んだ宝剣が伊勢で見つかったとして、朝廷に持ち込まれたのだ。その真偽をめぐり公家の論争があり、結論を見ないままうやむやになったが、北朝の公家社会にわだかまる神器への不安をのぞかせた事件として研究者に注目されている。だが4年後の正平7年、そんな不安も根こそぎにする大事件が起こった。足利氏の内紛である観応の擾乱に付け込んで京都を占拠した南朝軍が北朝の持つ神器を接収してしまったのだ。南朝から見れば偽器であっても、北朝は天皇の即位に用いてきた。それさえできなくしようというのが、南朝の狙いだった。以後の北朝は、神器なき皇位継承という深刻な事態に陥る。北朝公家の指導層の間では「神鏡と宝剣の本体は伊勢神宮と熱田神宮にある。その分身が天下のどこにあらうと、宮中にあると思えばよい」という、神器離れともとれる論理まで現れた。



北朝支配層の頭痛のタネだった神器不在問題は、明德3年(1392)の「南北御合体」で全面解決した。室町幕府第3代將軍足利義満の「皇位継承は南北交代にするから、三種の神器はとりあえず北朝に譲渡してほしい」という申し入れを、衰退した南朝が生き残りをかけて受託したからだ。しかし、北朝は皇位の交互継承という約束を反故にした。このため、南朝後胤の復位を目指す後南朝勢力は内裏を襲って神璽を奪う(嘉吉3年、禁闕の変)。それを將軍暗殺事件で失脚した赤松氏の浪人などが奪還して、長祿2年、神器はようやく内裏に帰還した。以後、現在までの560余年間、神器の安泰が続いているのは不思議とさえ思える。